

### 3 「世田谷の魅力を高めるまちづくり」報告書

世田谷の〈磁/地場〉探求に向けて

## 目 次

<b>第1章 研究の概要</b> . . . . .	<b>53</b>
第1節 研究の背景と趣旨	
第2節 研究の進め方	
<b>第2章 世田谷のいま</b> . . . . .	<b>55</b>
<b>第1節 世田谷区の地域資源</b>	
1.1 郊外住宅地・世田谷	
1.2 文化・歴史	
1.3 自然・公園	
1.4 豊富な地域資源	
<b>第2節 メディアのなかの世田谷</b>	
2.1 世田谷の魅力と観光資源	
2.2 住民のプライドが育てた世田谷	
2.3 世田谷ライフスタイル	
2.4 世田谷のイメージ	
<b>第3節 暮らしのまち—区民意識調査からみる「住宅都市」世田谷</b>	
<b>第4節 「住宅都市」世田谷を象徴する先進的な施策</b>	
<b>第5節 本章のまとめ</b>	
<b>第3章 世田谷の成り立ち</b> . . . . .	<b>68</b>
<b>第1節 歴史的地層から探る世田谷</b>	
<b>第2節 世田谷の歴史的地層</b>	
2.1 明治期の近郊農村世田谷 (1868-96年)	
2.2 軍事機関立地と郊外電車開通 (1897-1923年)	
2.3 関東大震災と郊外化のうねり (1924-40年)	
2.4 戦時統制と戦後混乱期 (1941-49年)	
2.5 戦後復興と住商都市世田谷の拡張 (1950-64年)	
<b>第3節 本章のまとめ</b>	
<b>第4章 世田谷の魅力を高めるために—20年度への問題提起—</b> . . . . .	<b>76</b>
<b>第1節 19年度のまとめ</b>	
1.1 世田谷の「磁/地場」の追求	
1.2 世田谷の魅力と政策科学としての都市社会学	
<b>第2節 対象地域と展望</b>	
2.1 成城	
2.2 下北沢	
2.3 東深沢エーダン商店街	
<b>第3節 来年度に向けて</b>	

## 第1章 研究の概要

### 第1節 研究の背景と趣旨

地方分権改革は1990年代半ば以降の第一次改革を経て、第二段階を迎えた。平成19(2007)年4月に地方分権改革推進法が施行され、その基本事項を審議するための地方分権改革推進委員会が発足し、精力的に審議が進められている。地方分権の基本理念とは、地方の自主性及び自立性を高めることによって、個性豊かで活力に満ちた地域社会の実現を図ることである。

地方分権の潮流のなか、地方自治体では自主・自立に向けた取り組みが積極的に進められている。とりわけ地域活性化策もその一つである。近年では、地域ブランドという言葉をよく耳にする。地域産品への関心が高まり、地域づくりの一環として地域産品のブランド化が注目されるようになったのである。特に、人口減少の著しい地方にとっては、地域ブランドによる地域活性化策に重点を置く自治体や地域団体が増えている。地域の特性や特産品を地域ブランドとして内外にアピールしイメージアップを進めることで観光客獲得や産品等の販売機会を拡大し、経済的効果を始めとした地域の活性化促進に大きな期待を寄せている。その効果は外部に対する商業的アピールにとどまらない。地域住民にとってはみずからの居住する地域と再び向き合う大きな機会であり、地域を肯定的なイメージで捉えなおす契機となりうる試みでもある。

これは、首都東京における世田谷区においても例外ではない。個性豊かで活力に満ちた地域社会を実現するには、住民の地域に対する評価が欠かせない。今後も都市世田谷が発展し続けるには、まず定住者である区民の満足度を向上させるため、良好な地域イメージを形成することが求められる。また、現代のように経済が発展し、成熟した社会においては、物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさも必要とされているのではないだろうか。心の豊かさとは、地域固有の歴史や文化、自然により育まれてきた「伝統」や「美しさ」、「情緒」といった、人々が心を感じ取るものが大きく影響しているように感じられる。地域社会において多様な価値観を持つ住民が自己実現を図り、生きがいを持って暮らせるという環境が、世田谷区の魅力を一層高めていくことになるだろう。そしてそのイメージを世田谷ブランドとして内外に発信し定着させていくことで、定住人口や交流人口の増加、企業の獲得、産品の販売機会の拡大という成果を生み出し、永続的に発展する世田谷の姿を見いだすことにもつながる。

本研究は、首都東京に位置しながらも、自然環境に恵まれ、様々な歴史的背景によって個性的な街が形成されてきた世田谷区を様々な角度から紐解き、それを整理することによって魅力の再発見や掘り起こしを行い、それらを世田谷のブランドとして、また付加価値として広く発信していくことに主眼を置き、更なる世田谷区の魅力拡大につなげることを目的として取り組むこととする。

### 第2節 研究の進め方

本研究は、研究期間を平成19年度、20年度の2ヵ年とし、地域資源を始めとした魅力に関わる基礎資料の収集・整理、歴史的背景による個性的な街の成り立ちの調査及びヒアリングを通じたフィールドワークを中心に進めるものとする。

(1)平成 19 年度

これまで断片的な情報や資料によっていた世田谷の魅力をトータルに掴み取るため、多方面からのデータを整理し、つなぎ合わせることで世田谷の印象を再認識する。

世田谷区の印象を把握するために、区民意識調査を活用し、区民から見た世田谷区の姿を整理する。また、「地域ブランド調査 2007」(株式会社ブランド総合研究所 2007)<sup>1</sup>によって区外から見た印象を整理する。さらに、旅行会社や出版社などからヒアリングを行い、メディアが見る世田谷区の印象を整理する。

また、世田谷区にある様々な資源について既存の資料を整理するとともに、世田谷区の街の成り立ちを歴史的見地から探る。

(2)平成 20 年度

世田谷区の魅力を、物質的な満足度に加え、心に豊かさが感じ取れるようなイメージを明らかにするため、平成 19 年度の研究成果を基に、世田谷区を代表する地域を選定し、その地域の成り立ちを物語風にして描く。

また、専門家などのヒアリング結果を参考にして、世田谷区だから出来る観光資源を提案する。

自然・緑(等々力溪谷公園)



文化施設(世田谷美術館)

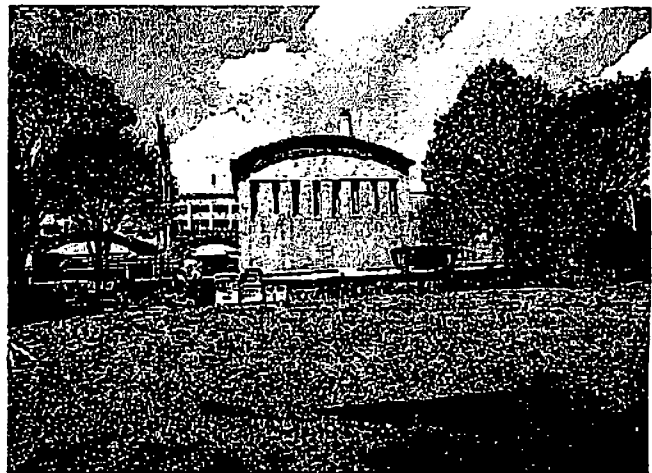


図 1-1 世田谷の地域資源イメージ

<sup>1</sup> 株式会社ブランド総合研究所, 2008, 「地域ブランド調査 2007」, 株式会社ブランド総合研究所

## 第2章 世田谷のいま

### 第1節 世田谷区の地域資源

#### 1.1 郊外住宅地・世田谷

世田谷区は東京23区中の西南端に位置している。東は目黒区・渋谷区、北は杉並区・三鷹市、西は狛江市・調布市、南は大田区とそれぞれ接し、さらに多摩川をはさんで神奈川県川崎市と向かい合っている。世田谷区の用途別土地利用面積を見ると、商業用地、住宅用地などの宅地面積は世田谷区全体の面積(5,808.2ha)の65.9%、3,825.5haとなっている<sup>2</sup>。総人口820,920人、総世帯数425,295世帯(平成19年1月1日現在の住民基本台帳)は、ともに東京23区中第1位である。世田谷区は、都心に近いうえ、交通の便のよい良好な住宅地としての性格が強く、大正初めから急激な勢いで人口が増加してきたが、全域に市街化が進み、昭和62(1987)年をピークに減少傾向にあった。しかし、平成8(1996)年からは再び上昇している。

高度経済成長期の製造業の発達に伴う東京圏の社会構造変化の中で、世田谷区は住民構成にやや特殊な地域特性を保持してきた。世田谷区は、東京都の約6割以上の区市町村がブルーカラー層中心の地域類型であった高度成長末期の昭和45(1970)年頃から平成12(2000)年まで一貫して、ブルーカラーが少なく上級ホワイトカラー<sup>3</sup>の多い地域類型(技能工・生産工程作業職30%未満、管理職・専門・技能職20%以上)で、戦後一貫して専門・管理職が多い「郊外住宅地」であった。つまり、大規模事業所数が少なく、比較的古くから家族形成層が多い地域であった<sup>4</sup>。

世田谷のイメージは何ととっても、西の芦屋・東の成城といわれるほど有名な住宅地であろう。全国的にも有名な成城や代沢、深沢、玉川園調布といった閑静で高級感のある住宅街がある。そして、閑静な住宅街にふさわしい、有名パティシエによる極上のスイーツの店舗が区内のあちらこちらに点在し、世田谷に住んでいる人や世田谷に遊びに来る人の舌を満足させてくれる。

世田谷の地域を形成する過程でその核となった活気ある商店街も世田谷の地域資源の一つである。その昔、千歳船橋に東京映画撮影所、桜3丁目に大蔵映画撮影所があり、ウルトラマンシリーズが撮影されていた。祖師ヶ谷大蔵駅前には、そのウルトラマンをシンボルにした地域密着型の「ウルトラマン商店街」がある。また、桜新町には、サザエさんをシンボルにした桜新町商店街もあり小さい子どもたちから大人まで楽しませてくれる。

#### 1.2 文化・歴史

世田谷はみどり豊かな武蔵野の自然にあふれる閑静な住宅地として発展し、多くの芸術家や文化人、区民みずからによる活動が活発に行われ、また、美術館や文学館などの施設も充実し、特色ある文化が形成されている。これらのものは区民のかけがえのない財産であり、世田谷の魅力を支える大きな要素となっている。また、世田谷区は平成17年度には、文化芸術の振興に関する条例を制定し、全ての区民が文化や芸術に触れ、文化的な環境を享受することで、心に潤いやゆとりをもって生活できる地域社会の実現を目指している。

<sup>2</sup>世田谷区都市整備部都市計画課, 2008, 『平成18年度 世田谷区土地利用現況調査』世田谷区。

<sup>3</sup>国勢調査の職業大分類による「専門・管理」にあたる職種を「上級ホワイトカラー」とした。

<sup>4</sup>松本康, 2004, 『東京で暮らす—都市社会構造と社会意識』東京都立大学出版会。

世田谷区には文化の拠点となる施設がいくつか存在する。その中でも先駆的な役割を果たしているのが世田谷美術館である。区民生活に根ざした幅広い活動を行うことによって、ここを拠点として自発的な文化活動や文化交流が展開され、区民の生活や文化が向上していくことを目指している。展覧会は、館の所蔵作品による展覧会や内外の美術館等の協力のもとに行う企画展覧会があり多くの来館者で賑わいを見せている。世田谷美術館分館としてオープンした向井潤吉アトリエ館は、民家を中心に風景画を描きつづけてきた名誉区民の故向井潤吉画伯から自宅兼アトリエを展示館に改修し、その作品とともに寄贈されたものである。他の分館として、清川泰次記念ギャラリーや宮本三郎記念美術館がある。

世田谷文学館は、文学を中心とした文化・余暇活動と交流の場を提供し、新たな地域文化の創造と区民文化の振興の拠点となることを目指し開館した。ここでは、世田谷区にゆかりのある文学資料の収集、保存、展示を通して文化遺産の収集を行っている。収蔵品の展示を始め企画展覧会を開催し区内外の人が訪れている。

世田谷文化生活情報センターは、区民の自主的な地域活動などの支援とともに、優れた文化・芸術を区民に提供することをめざしている。その機能は2つの部門から成り立ち、ひとつは「暮らしをデザインする」のコンセプトのもと、新しいライフスタイルを提案する「生活工房」と、もうひとつが現代演劇やダンスなどの公演のほかには舞台創作活動を身近に体験できる「パブリックシアター」がある。この2つを通じて文化と創造活動の場を提供している。

私設の静嘉堂文庫美術館や五島美術館には、国宝級の美術工芸品も収蔵されている。また、「サザエさん」の著者である長谷川町子氏のゆかりの地、桜新町には長谷川町子美術館がある。さらに、区内には郷土の歴史を伝える有形・無形の多くの文化財が残されている。代表的なものでは江戸時代の中期頃から続いている無形民族文化財の世田谷のボロ市がある。他にも史跡・旧跡など文化財の多さに驚く。このように住宅都市世田谷には、多くの文化財産に恵まれ文化の香りがただようまちであり、身近で文化を堪能できる世田谷といっても過言ではないだろう。

### 1.3 自然・公園

世田谷は都心に位置しているにもかかわらず自然が豊富なまちである。区内には、多摩川を始め、緑に覆われ湧水も現存する国分寺崖線、公園、緑地、社寺や住宅地の緑に加え農地の緑など、都内では有数の自然や緑が多く残されている。

公園や緑地は、区民の屋外における休息、鑑賞、遊戯運動レクリエーション利用などに設置され、区民の憩いの場となっている。特色ある代表的な公園としては、等々力溪谷公園がある。等々力溪谷は、谷沢川が玉川に合流する手前で、多摩川の段丘崖を浸食して形成された延長1Kmの開折谷で、都区内では希少な自然と溪谷美を残している。古い世田谷の農村風景を再現した次大夫堀公園、多摩川の水辺環境と歴史を生かした兵庫島公園など、緑や水といった貴重な自然空間と出会うことができる。また、都市公園・身近な広場も数多く点在し、その数は492箇所を数え、区民1人当たりの面積は3.00㎡となっている<sup>5</sup>。

<sup>5</sup>区立公園、区立身近な広場、都立都市公園(区内所在分)の合計面積を住民基本台帳人口で割ったもの。

#### 1.4 豊富な地域資源

前述してきたように、世田谷は単に住宅地として栄えたのではなく、自然環境や歴史的背景から受け継がれてきた、世田谷固有の文化によってその成り立ちを見せている。下北沢や三軒茶屋、二子玉川といった性格の違う繁華街の成り立ちもそれぞれの歴史的背景が基盤となっている。自然や歴史、文化、人を背景に裏打ちされた豊富な地域資源を持つ住宅都市世田谷は、生活者にとって住み心地がよいまちであるということがいえる。

### 第2節 メディアのなかの世田谷

世田谷の魅力は、自然や歴史、観光に関する書籍や統計データから感じ取ることができる。しかしそれは我々の感覚で受け止めたものであり推測の域を脱しない。

本節では、「世田谷の魅力」について観光に携わる専門家や生活者を中心に聞き取り調査を行った内容や、書籍等での世田谷に関する記述について整理しまとめたものである。

今回は、株式会社JTBパブリッシング（「るるぶ」発行元）と株式会社樫出版（「世田谷ライフ」発行元）にご協力をいただいた。

#### 2.1 世田谷の魅力と観光資源

JTBパブリッシングで発行する情報誌「るるぶ」は、全国各地の「見る」「食べる」「遊ぶ」を徹底的にガイドしたエリアマガジンとして、旅行者にはもちろん、地元の人にも役立つ情報誌として発行されている。広域版と地域版に分類されるが、地域版は住民にとっての生活情報誌でありライフスタイルの提案といった形に編集されている。平成19(2007)年11月「るるぶ世田谷・目黒」が発売されたが、購入者層の98%が地元住民ということである。自分が生活する地域の情報をもっと知りたいという思いがよく表れている数値である。

次に情報誌編集のポイントは、①観光資源を羅列しても効果は薄い。徹底的に資源を見直し、資源を組み合わせることが重要である。②ぱっと目につく「スター」を造ること。③人にスポットをあてる。「人」が観光の資源となる。人は「人」、「人の生き方」に関心があり知りたがる。こういった観点をもち、資源と資源を効果的に組み合わせ、「物語」風に描いていくことが必要である。

では、世田谷の魅力は？世田谷といえば閑静な住宅街を思い浮かべる人は多い。やはり全国有数の高級住宅地である。例えば、これを観光の視点で捉えれば、世田谷でも代表的な成城の生活スタイルを紹介する。成城で宿泊生活体験の実現が可能となれば、全国的に有名な高級住宅地成城でお試し生活ができ、その生活文化を存分に味わえる、といったことが思いつく。また、都市型農園も魅力の一つである。今では郊外型の農園体験はそれほどめずらしくないが、それが都会の真ん中で体験できるとすれば素晴らしいことである。「ウルトラマン」や「サザエさん」といった全国的に有名なキャラクターの活用は「心に満足感を得る」という効果が期待できる。現在ある資源を有効に組み合わせることによって、世田谷らしい観光スポットができるのではないだろうか。

#### 2.2 住民のプライドが育てた世田谷

「世田谷ライフ」は地元世田谷の暮らしをセンスアップする情報マガジンとして発行し

ている。世田谷ブランドを意識し、地域資源を効果的に組み合わせ、世田谷ならではの生活スタイルを提案するといった生活情報誌である。

「世田谷ライフ」創刊の発想は、地元の出版社として地元を受け入れられる情報誌を作りたいといったことが発端である。編集のポイントは、世田谷ブランドを意識し、それに恥じないように作成するにはどうするか。その視点が魅力の再発見につながるという。また、区民も区外の人も「世田谷って良い」という感覚は持っている。しかし、京都であれば社寺仏閣といった印象があるが、世田谷はこれといったブランドを証明できるものがない。いわゆる中途半端なまちである。それを活かすのが大切であるとのこと。それでは、「世田谷ブランド」とは？世田谷のまちには歴史がある。世田谷の地は歴史があるがゆえに住民はみずからの手でまちを築き上げてきたという自負心がある。それが住民のプライドとなっているのではないだろうか。「世田谷区内には美味しい飲食店が多い。」とか「世田谷のお店は、信用できるし美味しい。」といった言葉を聞くことがある。このような風潮は、世田谷住民のプライドが良い店を育て、世田谷住民の情報は間違いないといった感覚に結びついているものと思われる。

世田谷の魅力は、区の政策からも感じ取れる。安全・安心・子育て政策など住宅都市として、住みやすい印象がある。悪い印象はこれと違ってない。緑のイメージも強い。首都東京に位置しているにも関わらず多摩川や国分寺崖線といった自然が残り、多摩川には鮎の遡上もみられる。諸外国の首都を見ても例がないだろう。世界的にも珍しいのではないか。

農地も魅力の一つである。区民農園に応募が殺到するように、都市住民は作物を作ることに対して関心が強い。成城学園に開園した「アグリ成城」(有料農園)の例を見ても分かる。募集開始からわずか完売してしまう人気である。食に対する不安が広がるなか、安心感を求める女性に人気があるという。

また、人的資源も豊富である。多くの著名人が住んでいる。これも大きな財産である。世田谷の広告塔として活動してもらえばイメージアップにつながる。貴重な資源を効果的に活用し、目を引く、人を引き付けるような情報を流すことによって世田谷というブランドの価値はさらに上がるはずである。

### 2.3 世田谷ライフスタイル

ヒアリング調査を通じ、また「るるぶ世田谷・目黒」や「世田谷ライフ」といった情報誌から、世田谷の地に生活する人々の多様な生活スタイルを感じ取ることができる。

「世田谷は緑がたくさんある。休日は5歳になる息子と自転車で出かけることも多い。お蕎麦を食べて公園に行く。羽根木公園のファミリーパークはベーゴマや焚き火をやっていたりする。三茶の釣堀にも行く。」伊原純子氏(「ママリブ」主宰)。「家のいろいろな窓から緑を感じられ、冬の晴れた日には富士山も見られて、外に出ればすぐ野川がある。子育てするにもとてもいい環境だ。引っ越してきてから、野川沿いのウォーキングをはじめた。初夏には菜の花の黄色が鮮やかで、肌で季節を感じながら歩くのはとても気持ちいい。」椎名桜子氏(作家)。「駒沢オリンピック公園にはよく来る。芝生にシートを敷いて横になると、いつのまにか寝てしまう。フッと目が覚めるとリフレッシュしている。」SHIHO氏(モデル)。「世田谷区のイメージは、やはり緑が多いということが一番を感じる。」薬丸裕英氏(タレント)。「世田谷の魅力は、動物たちと暮らしやすい環境。豊かな緑に恵まれ、



犬の散歩ができる公園や遊歩道が豊富なところ。」田中美奈子氏(女優)。といったように、自然や公園、地域の資源を組み合わせ生活者が魅力と感じる独自のライフスタイルを作っている。

#### 2.4 世田谷のイメージ

世田谷を紹介する情報誌は、地域が持つ資源にレストランやスイーツ、カフェなどの飲食店を組み合わせたまち歩きの紹介や三軒茶屋・下北沢・二子玉川といった世田谷を代表する繁華街のお店の紹介や楽しみ方を紹介している。また、「池尻大橋はフレンドリーで個性的なまち」、「三軒茶屋は都会と暮らしが息づくまち」、「駒澤大学はスポーツや散策に最適なエリア」、「桜新町は四季折々に美しい桜並木の町」、「用賀は緑豊かな東京の西の玄関口」、「二子玉川は自然とおしゃれが共存するまち」といったように地域をイメージ化して紹介する雑誌もある。さらにテレビ番組でも数多くの世田谷の魅力が発信されている。これは、世田谷で生活すること、世田谷に訪れることによって、数え切れない生活スタイルや楽しみ方があるといったことを証明してくれているといえる。

次に区外の方は、世田谷区に対してどのような印象を持っているのか、「地域ブランド調査 2007(株式会社ブランド総合研究所)<sup>6</sup>」を参考にして整理した。

##### (1)住みたいまちランキング

住みたいまちランキングは住居意欲に関する設問を集計・分析している。第1位横浜市、第2位鎌倉市、第3位神戸市、以下京都市、札幌市と続き、第6位が世田谷区となっている。東京23区の中で最も高かったのが世田谷区で、続いて目黒区17位、港区19位という順番になっている。

##### (2)イメージ項目のランキング

世田谷区は、「生活に便利・快適」の項目が全国1位、「教育・子育て」の項目が全国第4位となっている。

##### (3)「魅力的な市」のランキング

全国で最も魅力的な市区町村は、第1位札幌市、第2位は京都市、第3位横浜市、以下、函館市、小樽市、神戸市、鎌倉市、富良野市、金沢市、軽井沢町と続き、世田谷区は第33位となっている。東京23区で見ると、渋谷区19位、新宿区22位、港区30位、次いで世田谷区である。

<sup>6</sup>「株式会社ブランド総合研究所が、市区町村のブランド化力を『見える化』し、地域ブランド戦略の指標として活用できるよう実施している調査。調査対象は、全782市(2007年6月現在)と東京23区、および地域ブランドへの取り組みに熱心な195町村を加えた1000の市区町村。全市区町村に対して、認知度、魅力度、情報接触度、イメージ(『歴史・文化のまち』など13項目)、情報入手経路(『旅やグルメに関する番組』など14項目)、観光意欲、居住意欲、産品購入意欲、地域資源への評価(『街並みや魅力的な建造物がある』)など15項目など全63項目について、インターネットを使い、全国から3万1169人の回答を集めて実施。1人の回答者に20市区町村に答えてもらったため、市区町村ごとの回答者は平均で632人。また、集計にあたっては、年齢、居住地、性別を基準に実際の人口の縮図となるよう再算出(ウエイトバック)している。」(株)ブランド総研, 2007, 『ブランド調査 2007』。

区外の人が見た世田谷の印象を整理してみると、全国 1000 の市区町村の中で、「住みたいまちランキング」が第 6 位となっている。イメージ項目別ランキング(表 2-1)では、「生活に便利・快適」部門が第 1 位で、「教育・子育て」部門が第 4 位、「魅力的な市」のランキングが第 33 位と、かなりの項目で上位を占めていることが分かる。

世田谷区の印象は、生活に関する評価が高いが、歴史・文化、観光・レジャー、学術・芸術といったイメージは低いことが分かった。しかし、世田谷区が有する多岐にわたる魅力を広く発信することでさらにイメージアップを進めることは可能である。それでは、区民はどう思っているのだろうか。

表 2-1 地域ブランド調査 2007 ランキング

項目	1位	2位	3位	4位	5位
生活に便利・快適	世田谷区	渋谷区	品川区	名古屋市	目黒区
教育・子育て	文京区	八王子市	国立市	世田谷区	つくば市
住民参加のまち	夕張市	岸和田市	杉並区	宮崎市	荒川区
防犯・防災に強い	網走市	神戸市	杉並区	淡路市	芦屋市
健康増進・医療福祉	野沢温泉村	富山市	水俣市	清瀬市	文京区
歴史・文化のまち	京都市	奈良市	鎌倉市	会津若松市	金沢市
学術・芸術のまち	京都市	宝塚市	つくば市	文京区	つくばみらい市
観光・レジャー	札幌市	函館市	小樽市	富良野市	軽井沢町
スポーツのまち	鈴鹿市	磐田市	鹿島市	苫小牧市	所沢市
国際交流のまち	横浜市	神戸市	横須賀市	京都市	成田市
環境にやさしい	富良野市	四万十町	軽井沢町	四万十市	屋久町
デザイン・センス	横浜市	神戸市	渋谷区	芦屋市	港区
IT・先端技術のまち	つくばみらい市	豊田市	日立市	つくば市	千代田区

### 第3節 暮らしのまち—区民意識調査からみる「住宅都市」世田谷

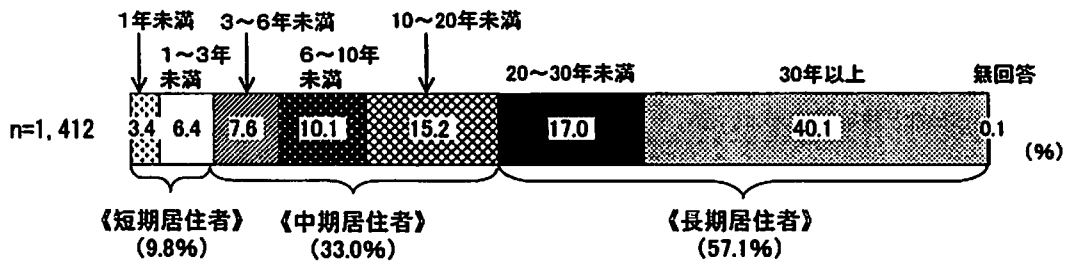
生活者である区民が感じている世田谷の印象を、平成19(2007)年実施の区民意識調査を基に整理した。

#### 3.1 定住性

世田谷区の居住年数は、「1年未満」(3.4%)と「1～3年未満」(6.4%)を合わせた《短期居住者》(9.8%)が1割となっており、「3～6年未満」(7.6%)、「6～10年未満」(10.1%)、「10～20年未満」(15.2%)を合わせた《中期居住者》(33.0%)が3割を超え、「20～30年未満」(17.0%)と「30年以上」(40.1%)を合わせた《長期居住者》(57.1%)が6割近くとなっている。

《長期居住者》に、生まれた時から世田谷区に住んでいるかを聞いたところ、生まれたときからの居住者は28.5%、区外からの転入者は71.2%である。

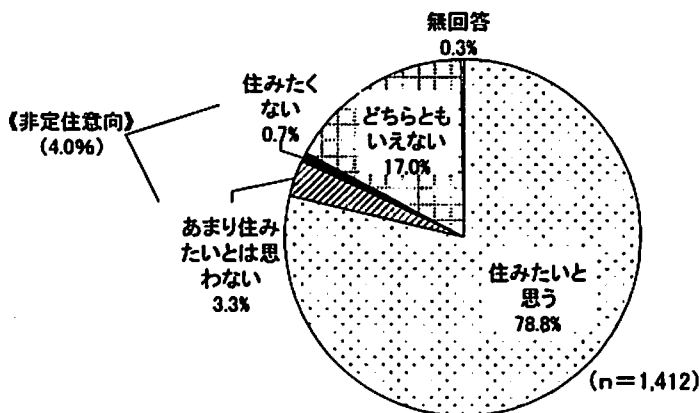
表2-2 定住性



#### 3.2 定住意向

今後の世田谷区への定住意向を聞いたところ、「住みたいと思う」(78.8%)が8割近くとなっている。「あまり住みたいとは思わない」(3.3%)と「住みたくない」(0.7%)を合わせた《非定住意向》(4.0%)は1割に満たない。

表2-3 定住意向

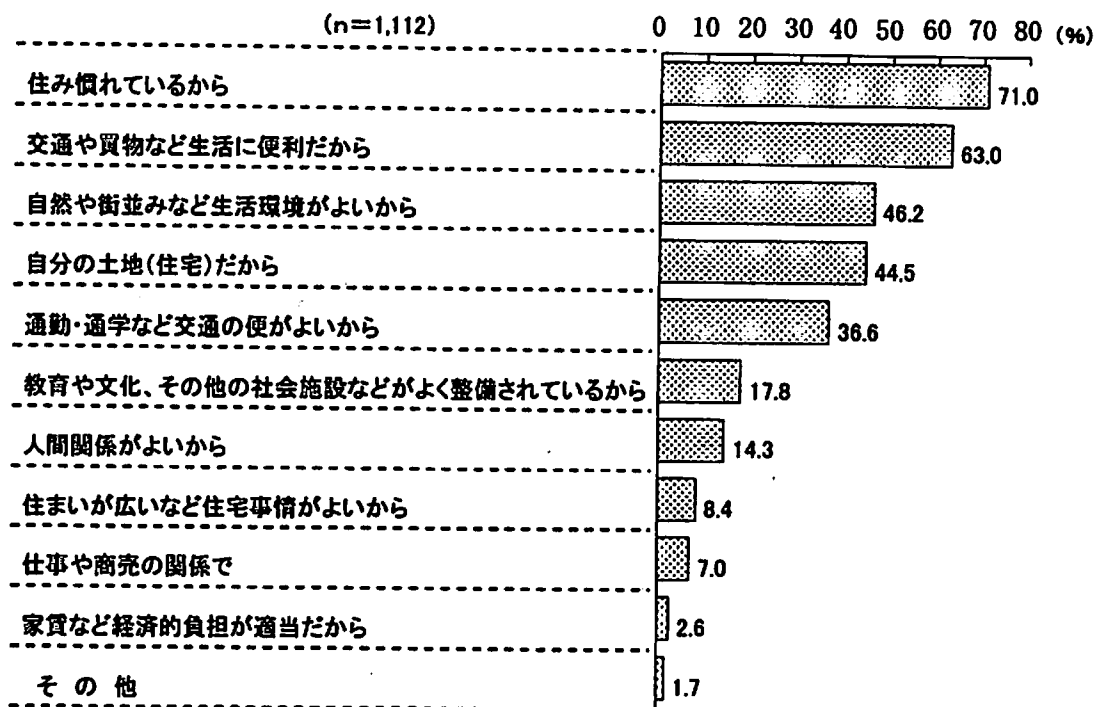


#### 3.3 定住意向理由

今後も世田谷区に「住みたいと思う」と答えた方(1,112人)に、その理由をきいたところ、「住み慣れているから」(71.0%)が7割を超え最も多く、以下、「交通や買物など生活に便利だから」(63.0%)、「自然や街並みなど生活環境がよいから」(46.2%)、「自

分の土地（住宅）だから」（44.5%）、「通勤・通学など交通の便がよいから」（36.6%）などと続いている。

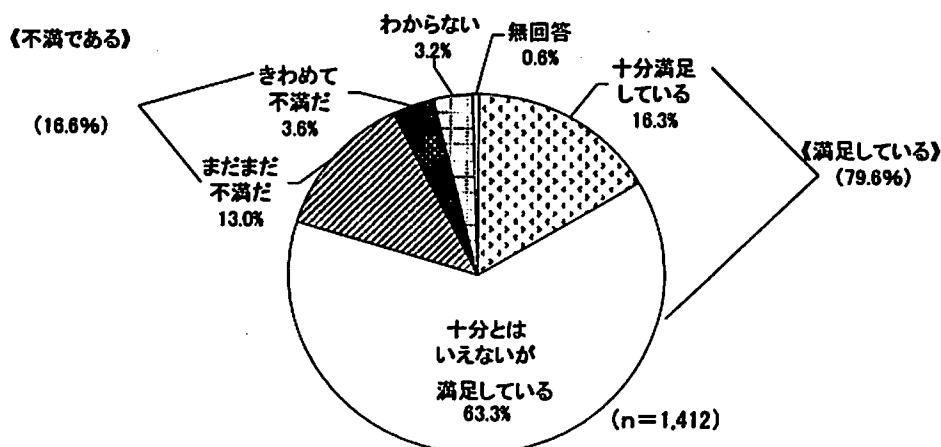
表 2-4 定住意向理由



### 3.4 暮らしの満足度

現在の暮らしについてどのように思っているか聞いたところ、「十分満足している」（16.3%）と「十分とはいえないが満足している」（63.3%）を合わせた《満足している》が79.6%と8割となっており、「まだまだ不満だ」（13.0%）と「きわめて不満だ」（3.6%）を合わせた《不満である》（16.6%）を大きく上回っている。

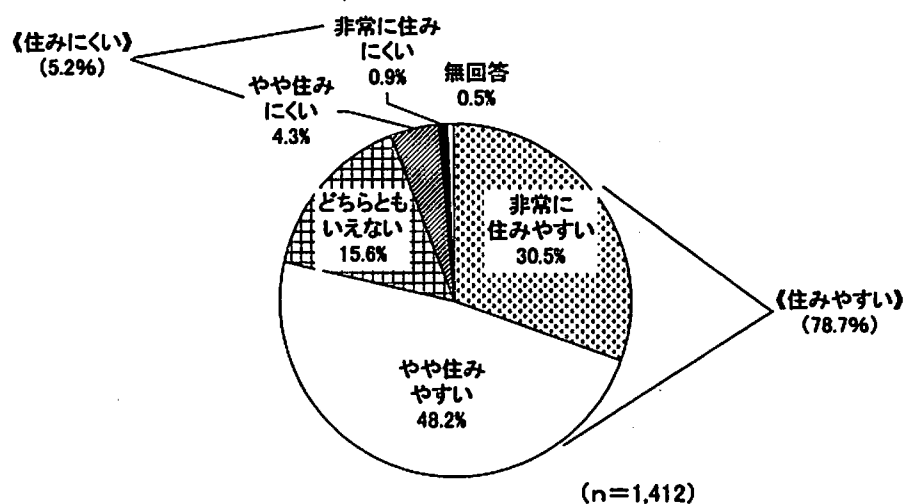
表 2-5 暮らしの満足度



### 3.5 住みやすさ

世田谷区の住みやすさについて聞いたところ、「非常に住みやすい」(30.5%)と「やや住みやすい」(48.2%)を合わせた《住みやすい》(78.7%)は8割近くとなっており、「やや住みにくい」(4.3%)と「非常に住みにくい」(0.9%)を合わせた《住みにくい》(5.2%)を大きく上回っている。

表2-6 住みやすさ



区民意識調査の歴史は長く、過去の調査から興味深い結果を読み取ることができる。昭和46(1971)年に行われた「第5回区政世論調査」<sup>7)</sup>によれば「世田谷区民としての自負をもつか」という問いに対して、60.1%の人が「持っている」と答え、「時々持つ」が16.4%、合わせると76.5%となっている。ここから区民が区への帰属意識をもっていたことが分かる。この「自負」の内容はともかく、「世田谷区民」としての意識が広範に形成されていたことを示している。当時の結果が直接現在の回答につながるとは言えないが、平成19年度区民意識調査の回答を見ると、定住性は中期居住者3~20年未満が3割を超え、長期居住者20~30年以上が6割近くとなっている。暮らしの満足度の回答は「満足している」(79.6%)約8割、住み易さ「住みやすい」(78.7%)約8割となっている。今後の定住意向の回答も「住みたいと思う」(78.8%)が約8割となっている。その理由は、「交通や買い物に便利」、「自然街並みなど生活環境がよい」、「通勤・通学など交通の便がよい」といった回答であり、世田谷区の印象は相対的に「住みやすいまち」と評価されている。これは、過去の歴史から推測しても、首都東京の「住宅都市」として先進的なまちづくりや、生活環境・福祉に関する行政施策を積極的に取り組んできた成果ではないだろうか。

<sup>7)</sup>せたがや百年史編纂委員会, 1992, 『世田谷百年史 下巻』世田谷区。

#### 第4節 「住宅都市」世田谷を象徴する先進的な施策

高度成長期がもたらした急激な都市化による影響は大きく、大気汚染、水質汚染、騒音公害など生活問題に深刻な影響を与えた。世田谷区は、長期的な展望に立った計画策定の必要性を痛感し、先取りのな政策を打ち出すことが求められていた。次代を見据えた計画行政の始まりである。

##### 4.1 安全安心のまちづくり施策

昭和50年代の世田谷区は、住宅都市としての地位を不動のものとしていく一方で、マンションの増加やミニ開発に伴う住環境問題の発生や地価の高騰、交通・下水道・公園・施設等の社会的基盤の整備など、さまざまな問題に直面していった。区では、昭和46(1971)年に策定された「世田谷区総合計画」にかわって、以後の区政の将来方向を示す基本的指針となる「東京都世田谷区基本構想」を昭和53(1978)年6月に策定した。これを受けて、昭和54(1979)年を初年度とする「世田谷区基本計画―福祉社会をめざすヒューマン都市世田谷」が策定された。この計画は、区民の生活にかかわる環境を守り改善する。区民が安定し充実した社会生活を営むことのできる条件づくり。この二点に集約できるものであった。基本構想に基づくまちづくりは、都市基盤の整備、環境保全、文化の香りあるまちづくりなど総合的な観点から推進され、特に大きなプロジェクトとして防災まちづくりと市街地再開発が計画された。

いつの時代においても安全で安心して生活することのできる地域社会を築くことは、区民共通の願いである。このように昭和50年代には居住環境の整備や自然環境の保全などに取り組み住み心地のよい住宅都市世田谷が形成されていった。

また、平成14(2002)年には「安全安心まちづくり条例」の制定にともない、「安全安心まちづくり協議会」の発足、同15(2003)年には「24時間安全安心パトロールの実施」、同16(2004)年には「安全安心まちづくりカレッジの開催」や23区に先駆けて「危機管理基本マニュアル」を策定した。平成17年を初年度とする世田谷区基本計画では、今後10年間をとおして、区民とともに実現を目指す将来目標として、「魅力あふれる 安全・安心のまち世田谷」を掲げるなど、区民の生活を守る安全・安心への取り組みに重点が置かれている。

##### 4.2 福祉・子育て支援施策

昭和50年代以降、社会構造の変化に伴って福祉の面でも従来型の社会保障・社会福祉諸施策だけでなく、多面的な政策が求められるようになった。また、老人医療費公費負担の廃止や健康保険制度の本人10割給付の廃止といった国の社会福祉施策の改革の影響は大きく、区はこうした状況に対応するべく新たな福祉のあり方を模索しなければならず、一方では国民の福祉への充実の要求は一層強まっていた。

昭和54(1979)年策定の基本計画では、福祉と保健・衛生の双方を取り込み総合福祉の観点から福祉施策が立案された。しかし福祉情勢の変化も速く、次々と新たな対応に迫られた。そこで福祉施策の見直しをすることとし、昭和55(1980)年に区及び学識経験者等福祉専門家で構成された「世田谷区福祉総合計画立案プロジェクトチーム」が結成され、その成果は「世田谷区総合福祉計画」として発表された。世田谷区総合福祉計画は、「縦割行政の排除と総合化の体制整備」「区民活動との連携と支援」を基本方針とし、社会福祉・

保健施策、地域の社会福祉・保健体制づくりからなるものであり、当時としては先進的な取り組みであった。また昭和50年代は、高齢者社会への対応も迫られた時期でもある。老人会館の設置などの老人向け施設を設置するとともに、老人福祉サービスの充実が図られた。昭和50年半ばには、ボランティアグループが協力した「給食サービス」や「ふれあいサービス事業」の実施など、昭和50年代の高齢者対策は、ボランティアをはじめとした住民の積極的な協力を得て実施された点が大きな特徴である。

近年では、少子化対策が叫ばれるなか、区では東京一子育てしやすいまちを目指しており<sup>8</sup>、こども・子育て総合センターの開設、子育てひろば、お子さん預かり「ほっとステイ」、世田谷子育てカレッジの開講、世田谷子育てテレフォン、子育てステーションの設置、病児・病後児保育の実施、産後ケアセンターの開設、さんさんサポート、妊産婦検診助成の拡充、中学生までの子どもの医療費の助成など幅広い子育て支援策を実施している。

#### 4.3 先進的なまちづくり施策の数々

昭和30年代の高度成長は首都東京への産業の集中を促進した。昭和37(1962)年、世田谷区の人口は66万人に達し、同44(1969)年には世田谷区の人口は75万人を超える大都市となった。人口の増加とともに農地を宅地に転換した住宅地化が進み、賃貸住宅も増加の一途をたどった。都市部への人口集中は、公害問題やゴミ問題、自然環境破壊などを引き起こすなど生活環境にマイナスになる面も大きく行政による適切な対応が求められた。

昭和42(1967)年3月に発表された「世田谷区総合計画」は、「緑と太陽の文化都市」の実現を目標にしたもので、区独自で策定した最初の計画であった。昭和30年代以降の急激な都市化による世田谷区の変化と、今後の生活環境の悪化を予想した長期的な展望に立った計画であり、都市問題に対して対症療法的な対応でなく、まさに先取りの政策を打ち出したものであった。まさに世田谷区は、歴史的に見ても西の神戸・東の世田谷と言われるほど全国に先駆けた先進的なまちづくり施策を実践してきた。

表2-7 先進的なまちづくり施策

実施年	内容
1967年	緑と太陽の文化都市の実現を目標とした「世田谷区総合計画」策定 区独自の最初の計画
1971年	全国初となる「みどりの保全に関する条例」の制定
1979年	住民参加型のまちづくりで羽根木プレーパークの設置
1982年	・都市デザイン室を発足し、福祉のまちづくりのための施設整備要綱を制定 ・全国に先駆けて世田谷区街づくり条例を制定
1984年	せたがや百景選定
1984年～	せたがや界限賞の開催
1985年～	都市美シンポジウムの開催
1987年～	都市デザインモニターの実施
1988年	世田谷清掃工場煙突デザインコンペの実施

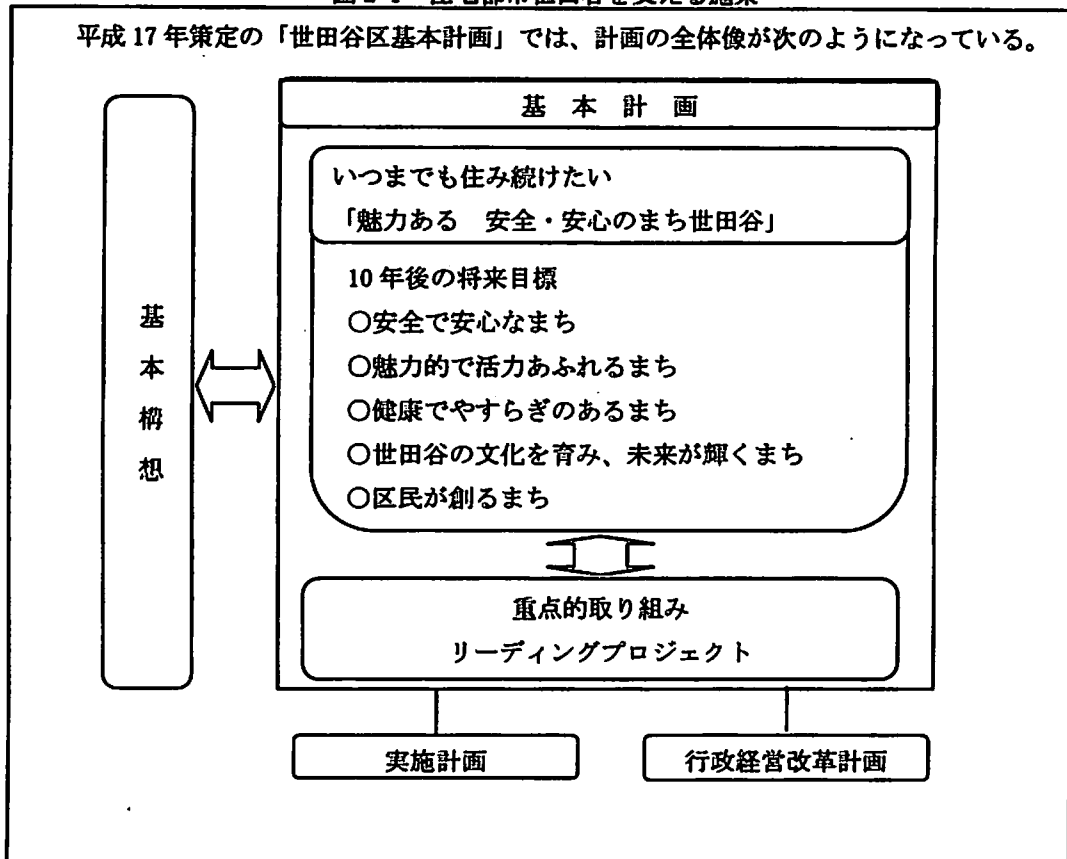
<sup>8</sup>区長就任挨拶、2007、『区のおしらせ（広報せたがや）5月15日号』世田谷区。

1990年	・世田谷区住宅条例の施行 ・希望が丘団地内にLSA付き高齢者向け住宅を開設
1991年～	百景ラリーの開催
1992年	世田谷まちづくりセンターを設立
1992年～	エコロジカルなまちづくり塾の実施
1994年	住民参加型のまちづくりによるねこじゃらし公園の開園
1995年	世田谷福祉いえ・まち推進条例の制定
1999年	風景づくり条例の制定
2007年	ユニバーサルデザイン推進条例の施行
2007年～	選定地域風景資産展覧会

世田谷区は 84 万区民を支える時代に応じた区民本位の施策の実施や充実に力を注いできている。住民にとって「住みやすいまち世田谷」と言っても過言ではないだろう。

そして、都心に位置しながらも多くの自然があり、その貴重な自然環境を守ることで、望ましい生活環境を育み、地域の資源環境に配慮した環境と共生する社会を実現すべく住環境の整備に取り組むなど、ひとびとの生活と自然が調和し、いつまでも住み続けられるまち世田谷の実現に向けて、区民の目線に立ったきめ細かい施策に取り組んでいる。

図 2-1 住宅都市世田谷を支える施策



<sup>9</sup> LSA ライフサポート・アドバイザー。



## 第5節 本章のまとめ

本章では、「世田谷のいま」として現在の世田谷がもつ魅力に多角的な接近をはかってみた。第1節で世田谷のもつ様々な地域資源について確認し、第2節ではその商業的な活用を、およびその効果ともいえる区外の人々が持つ世田谷へのイメージを「地域ブランド調査2007」をもとに検討を行った。

その結果、商品としての世田谷区を「売る」に際しては、都心に程近いにもかかわらず自然環境が豊かであるという側面や、多数の有名人が居住し、スイーツなどの消費文化を発信する、「高級感」のある「先進的」な住宅地としての側面が強調されていることがわかってきた。同時に、ライフスタイルや町並みの多様性への指摘があることも重要であろう。この多様性が商品としての世田谷に一意的な意味づけを与えにくくする一方、多様性自体を売りにするという戦略の存在を確認することができた。他方、ブランド総研によるランキングではそういった幾分にもファッションナブルな分野への評価よりも「教育」や「安全」などの分野で高位を獲得しており、区外の人々からは世田谷での「暮らし」の実際的な側面が評価されていることがうかがえる。

これらをふまえ、区民意識調査結果の再検討を通して実際に世田谷区に居住する人々がもつ世田谷に対する印象を整理したものが第3節である。そこでもやはり「暮らしやすさ」に対する評価が一様に高く、また第4節で見たように世田谷区の施策の数々も暮らしやすさをサポートする方向で打ち出されてきており、むしろ「先進性」として注目すべきは全国に先駆けて制定される種々の条例を生み出す、住民と行政との協働関係であるということもできるだろう。

以上のことから、世田谷の魅力を考察するためには、「高級感」や「先進性」などの商業的価値を生み出す土壌ともなっている、「多様性」と「暮らしやすさ」という生活の実際に即した部分に着目することが重要であろうと思われる。暮らしやすさに関しては本章の議論を通して住民と行政の間の協働関係が明らかになった。次章では、世田谷区の多様性がどのように獲得されてきたのかを探るため、世田谷の都市形成史に接近してみよう。

### 第3章 世田谷の成り立ち

#### 第1節 歴史的地層から探る世田谷<sup>10</sup>

われわれが世田谷の特徴ないし魅力を捉えようとする時、しばしばその地域社会の多面性に困惑する。その表情が地域ごとにモザイク状に変化し、ひとつの「印象」「魅力」といったものでは括ることができないのである。本節では、現在の「世田谷区」の多面性を理解するために、世田谷の都市社会の形成過程を概観する。

端的に言えば、その多面性の要因は第1に、明治地方自治制の制定から大東京市成立までのめまぐるしい地域社会の再編に求められる<sup>11</sup>。第2には、各時代・各地域に特徴的な機関が配置され、これらが多様な社会層を流入させたことが挙げられる。この都市形成過程が、人びとに世田谷の「多面的な印象」と同時に「まとまりの無さ」を感じさせる。これらの世田谷の歴史的地層を掘り起こすことで、各地域の特徴と魅力の源泉（＝磁/地場）を明確にする。この過程を通して初めて、複合的な世田谷の魅力を適切に明示することが可能になる。

表 3-1 世田谷の都市形成と諸機関（世田谷区都市整備部都市計画課 1992<sup>12</sup>を基に作成）

都市形成の展開	特徴的地域と諸機関
2.1 1868-96年 明治期の近郊農村世田谷 近郊農村としての世田谷 近代化の歩みと世田谷の町村	【国民統治機関】廃藩置県大区小区制で世田谷42村再編（多くは東京府荏原郡に属し、千歳・砧地域の村は神奈川県北多摩郡に編入） 市制町村制で6行政村に統合（世田谷・松沢・駒沢・玉川・千歳村・砧村）
2.2 1897-1923年 軍事機関立地と郊外電車開通 軍事機関の立地 郊外電車の開通／初期の住宅地開発 高等教育機関や新しい施設の進出	【軍事機関】三宿・三軒茶屋 【交通機関】明治40（1907）年玉川電社開通（東京市区改正事業による多摩川の砂利供給） ⇒新町住宅／太子堂府営住宅 【教育機関】駒沢大学
2.3 1924-40年 関東大震災と郊外化のうねり 関東大震災と世田谷 交通機関の整備 成城学園周辺のまちづくり 玉川全円耕地整理事業 市街地建築物法等の制度適用 基盤整備事業の進展 都市計画街路網の決定 住宅地開発と生活基盤	【教育・住商・信仰機関】関東大震災による東京からの焼けだし：成城町（牛込から教育機関と父母の分譲住宅）／太子堂・下の谷商店街（台東区下谷から）／烏山寺町（下町から寺院移転） 【交通機関】目蒲線・東横線・大井町線開通（⇒二子玉川の宅地化） 【交通機関】玉川電車：三軒茶屋駅付近に世田谷町営住宅建設
2.4 1941-49年 戦時統制と戦後混乱期 東京緑地計画と世田谷の大公園 戦時下の土地利用規制 統制令下の住宅事情	【軍事機関】住宅営団・深沢3丁目住宅（エーデン商店街）
2.5 1950-64年 東京集中と市街地拡張 緑地地域指定／緑地地域の指定廃止・解除 軍事機関の跡地利用 東京オリンピック開催事業	【商業機関】下北沢・三軒茶屋等の闇市（戦後復興の空間的シンボリズムの表出）

10 地域に堆積した歴史を「地層」と表現した。

11 明治4年廃藩置県後、大区小区制で世田谷42の自然村は再編、多くは東京府荏原郡に属し、千歳・砧地域の村は神奈川県北多摩郡に編入。明治21年市制町村制で各村6つの行政村（世田谷・松沢・駒沢・玉川・千歳村・砧村）に合併。昭和7年大東京市成立で世田谷区が成立する。

12 世田谷区都市整備部都市計画課，1992，『世田谷区まちなみ形成史』世田谷区。

## 第2節 世田谷の歴史的地層

### 2.1 明治期の近郊農村世田谷（1868-96年）

江戸の末期、世田谷地域は42の村々に分かれ、その支配は天領・旗本領・大名領（彦根藩井伊領）、寺社領の4つに組み込まれていた（世田谷区都市整備部都市計画課1992）。世田谷各村は、渋谷宿・内藤新宿・世田谷宿に近い利点を生かして近郊農業を営み、多くの野菜・果実を出荷していた（佐々木2001<sup>14</sup>）。明治2（1869）年「府藩県三治の制」により世田谷は品川県と彦根藩領に引き裂かれる。明治4（1871）年廃藩置県で世田谷20村は東京府に属し、千歳・砧は神奈川県に編入される。さらに、明治政府は「大区小区制」を施行。これは、ムラ共同体を突き崩し、国家行政の能率化を図ろうとするものだった（世田谷区編1976<sup>15</sup>）。これにより、世田谷各村は右のように分割される。

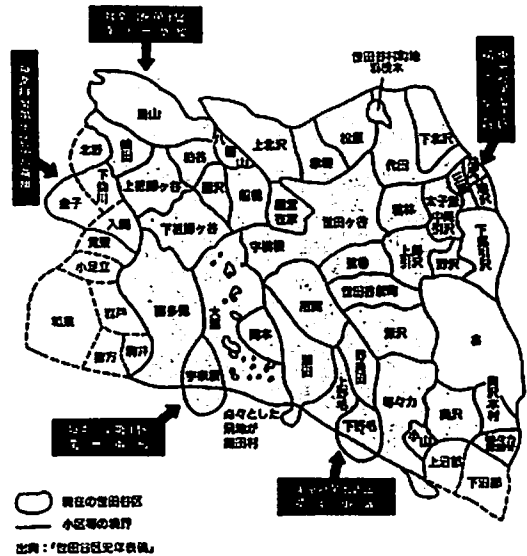


図3-1 大区小区制時代の世田谷（高橋他1992<sup>13</sup>）

明治11（1878）年の「郡区町村編成法」は、大区小区制を廃止、旧来の町村を復活させるとともに、小村は連合村を形成することが求められた。後に世田谷区を形成する27村は東京府荏原郡に、砧・千歳地区13村は神奈川県北多摩郡に編入された（世田谷区都市整備部都市計画課1992）。明治21（1888）年、市町村制実施により町村合併。荏原郡は村々を世田谷村・松沢村・駒沢村・玉川村の4か村にまとめる。下北沢村や代田村は、経堂在家村・三宿村・太子堂村などとともに世田谷村に合併される。統合機関たる首都東京によるこのような地域社会の再編が、世田谷の社会的世界のモザイク模様を生み出したひとつの要因と言える。

### 2.2 軍事機関立地と郊外電車開通（1897-1923年）

明治30年代以降、統合機関たる軍事機関の移転、結節機関たる郊外鉄道駅の創設により、世田谷は近郊農村から都市へと次第に姿を変えていく。「東京市中の人口は、新しい都市づくりを目指す市区改正事業の実施、また日清・日露戦争を踏台とした都市産業の発達と相まって飛躍的に増加をしめしはじめていた。このことは、世田谷地域を含め

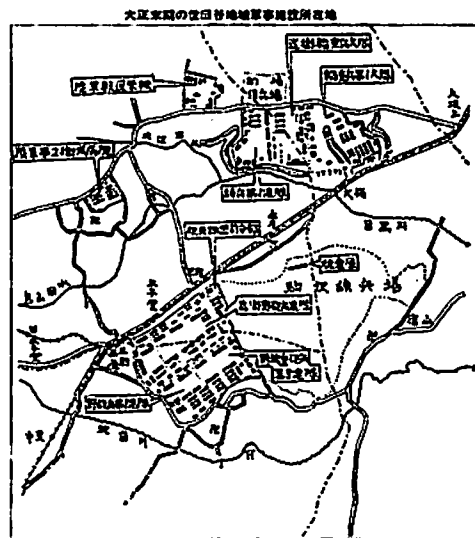


図3-2 軍事施設（世田谷区編1976）

13 高橋勇悦・園部雅久・川崎賢一，1992，『せたがや百年史』世田谷区。

14 佐々木隆爾，2001，「下北沢の歴史」『大都市の卸・小売業の現在と未来——若者のあふれる世田谷・下北沢商店街の分析』こうち書房。

15 世田谷区編，1976，『世田谷近・現代史』世田谷区。

た近郊農村地帯を都市人口の消費物資や労働力の供給基地として東京市の勢力圏に巻きこみ、この地域の農業の態様を変化させずにおこなった。しかし急激な膨張をつづける東京市は、次第にこの地域の農地を侵食しながらみずからの拡張を開始し始めた。軍事機関の移転にはじまり、交通機関の設置・拡充、これにつづく市民の流出は、好むと好まざるとにかかわらず、世田ヶ谷村に村から町への変化を課したのである」(世田谷区 1976:697)。

(1) 軍事機関の立地—三宿・池尻・太子堂・三軒茶屋・下北沢

1890年代、軍事機関が東京中心部から世田谷と目黒にまたがる駒場野に移転しはじめる。明治末には、三宿・池尻・太子堂・三軒茶屋に軍事機関が集中。三宿には兵隊相手の商家も現れる。明治40(1907)年、玉川電車が道玄坂上-三軒茶屋、渋谷-玉川間を全通する(図1)。これにより、将校等が渋谷付近に屋敷を構え世田谷へ通う。このとき、下北沢・世田谷などに住居を持つ者が現れるのであった。

(2) 郊外電車の開通と住宅地開発—新町住宅・太子堂府営住宅・上野毛

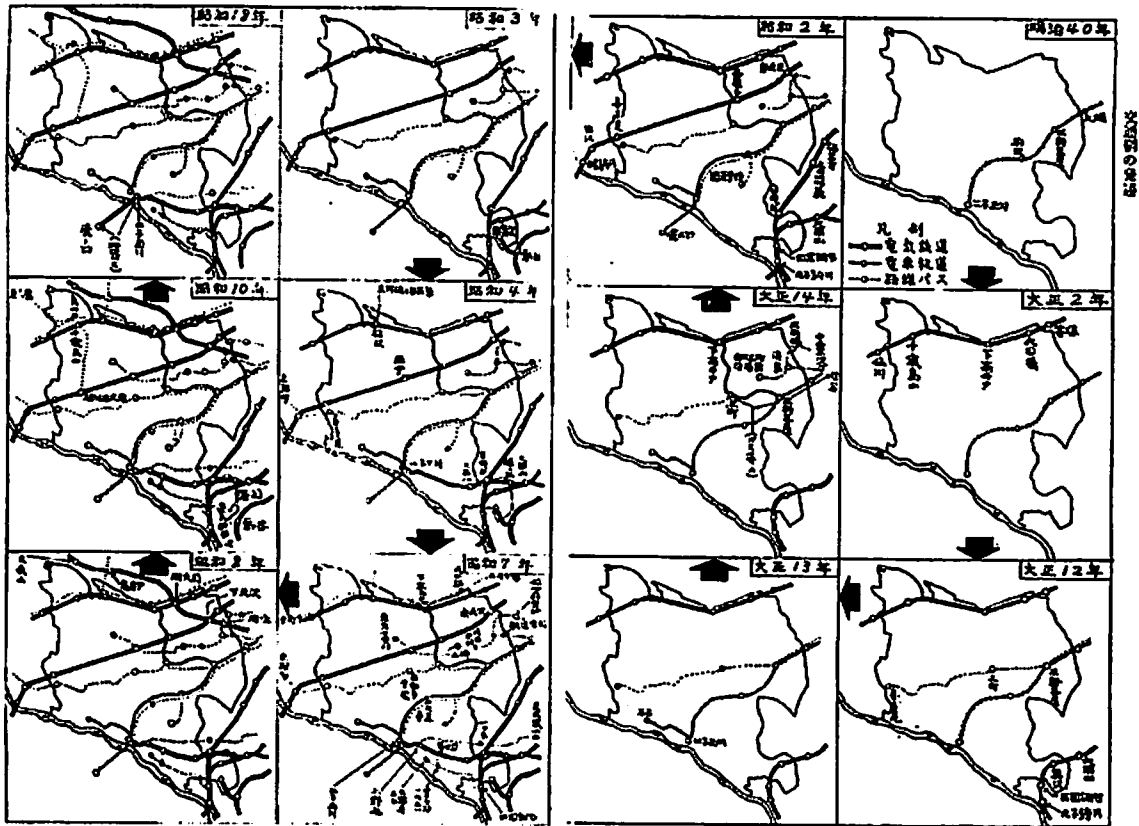


図 3-3 世田谷の交通機関の発達 (世田谷区 1976)

東京市内では「東京市区改正事業」が本格化しており、軍事機関の移転もこうした事業の進展が背景にあった。玉川電車も京王線も当初は「市区改正事業」に使う多摩川の砂利輸送用に建設された鉄道であった。大正元(1912)年に開発された東京信託株式会社の「新町住宅」は駒沢村深沢と玉川村下野毛にかかる山林・原野を切り開いた分譲住宅地であった。電鉄により電気の供給を受け電灯を使用、排水溝・浴場・商店等を配した文化住宅地として売り出された。中心街には1000本の桜が植えられたことが「桜新町」の名の由来となる。

大正期の都市化は住宅不足を招く。明治 9 (1921) 年には東京府住宅協会により公的住宅の先駆となる 140 戸の太子堂府営住宅が建設された。公設市場・児童遊園をそなえた本格的な公営住宅となる。さらには、多摩川左岸の「国分寺崖線」沿いに、岡本から上野毛にかけて華族・実業家・政治家等の別荘や邸宅が立地する。「高級住宅地としての世田谷」という空間的シンボリズムが発生していく。

明治 40 (1907) 年、徳富蘆花は新宿から 3 里にある千歳村粕谷へ転居した。当時は鉄道もまだ敷設されていなかったこの地で、蘆花は農作業にいそしみながら、その生活ぶりを書き始めた。そこには「東京の侵略」を目の当たりにした近郊農村の住民の社会的世界が描かれる。「東京が大分攻め寄せて来た。東京を西にさるたった 3 里、東京に依って生活する村だ。200 万の人の海にさす潮、ひく汐の余波が村に響いて来るのは自然である。東京でガスを使うようになって、薪の需用が減った結果か、村の雑木山がだいぶ拓かれて麦畑になった。道側の並木の櫟柎なぞ伐られ掘られて、短冊形の荒畑が続々出来る。武蔵野の特色なる雑木山をむざむざ拓かるのは、儂にとっては肉を削がるる思いだが、生活がさすわざだ、致し方は無い」(徳富 1912<sup>16</sup>)。ここで描かれるのは「郊外化」の原初形態である。

## 2.3 関東大震災と郊外化のうねり (1924-40 年)

### (1) 関東大震災と郊外住宅地世田谷

近郊農村だった世田谷では、大正 12 (1923) 年の関東大震災はそれほど大きな被害をもたらすことはなかった。しかし区域に与えたインパクトとしては、東京市内の中心部に勝るとも劣らない大きなものであったといえる。折からの東京市域の拡大に拍車がかかったことにより急速な宅地化の波が押し寄せてきた。すでに飽和状態に達していた市内の人口は、震災をきっかけとして急激に郊外へ、特に東京西郊に向かって流れはじめた(世田谷区都市整備部都市計画課 1992)。現在の世田谷区にあたる世田谷・松沢・駒沢・玉川・千歳・砧の 6 ヶ村を合わせた人口をみると、大震災前の大正 9 (1920) 年に 39,966 人であった人口が震災後の大正 14 (1925) 年には 87,965 人に、さらにその 5 年後の昭和 5 (1930) 年には 146,362 人へと激増している。「サラリーマン層も被災を機会に、『健康的』『閑静』な、しかも都心部より家賃の安い市の周辺部や近郊に続々と居を移した」。「都心の業務地区、商業地区に対して、郊外の住宅地区化、ひと口に言えば都心と郊外の機能分化が進みはじめたのである」(世田谷区同)。この宅地化のうねりにより、「郊外住宅地・世田谷」は確立されていく。

### (2) 成城学園周辺のまちづくり

大震災によって郊外へと移ってきたのは通勤者に限られていたわけではない。東京市内の牛込に校舎を構えていた成城学校も震災を機に郊外へ転出することになった。当時の成城学校長であった元東北帝大総長の沢柳政太郎は海外のキャンパスを念頭においた理想の学園都市を郊外につくろうと思いつく。同じく成城学校の主事であった小原国芳がこれに賛同して移転に向けた計画が開始される。この小原の活躍はまさに八面六臂というにふさわしい、成城を語る上で欠かせないものであった。

16 徳富健次郎, 1912 (1977), 『みみずのたはこと』岩波書店。

開発における成城地区の特色は、それが企業や行政といった専門集団の手によるものではないところにある。沢柳も小原も理想に燃える熱心な教育者ではあったが、町づくりに関しては全くの素人であった（藤見 1976<sup>17</sup>）。その彼らが、小田急電鉄の前身にあたる中央電鉄と交渉し、学園前に駅を建設する約束をとりつけ、地元の有志たちによる協力で後押しされて、それまで7軒の農家が点在するだけであった当時の砧村喜多見、現在の成城の地に学園の移設を決定したところからこの町の歴史がはじまった。ことに小原は「みずから測量し、図面を引き、地主との交渉にあたった」ともいわれる（高橋他 1992）。大正 13（1924）年には学園の父兄らも参加して成城学園後援会地所部が発足し、本格的に開発がスタートした。この成城学園が住宅地として成長してゆくうえで注目されるのが、「生垣協定」ともよばれる居住に際しての申し合わせである。土地分譲契約には騒音や煙害などを戒める近隣公害防止に関する一文が記された。さらに後援会地所部では板塀を廃し、生垣または石垣とすることが決められていた。この環境整備にあたっては、住民である民俗学者の柳田國男が積極的に活動したとされている。

### (3) 大東京市成立

震災によって一層拡大した郊外化への対応が、世田谷地域の大きな課題となる。電鉄系の住宅地開発やさまざまな分譲地開発がみられ、三軒茶屋駅付近（図 3-5）等に町営住宅や同潤会の分譲住宅、低利資金貸付による公的住宅が建設された（世田谷区都市整備部都市計画課 1992）。そして、昭和 7（1932）年大東京市が成立し「世田谷区」が誕生する（図 3-4）。この時、千歳・砧村が世田谷区に編入され、現在の行政区画が完成する（世田谷区 1976 : 795）。

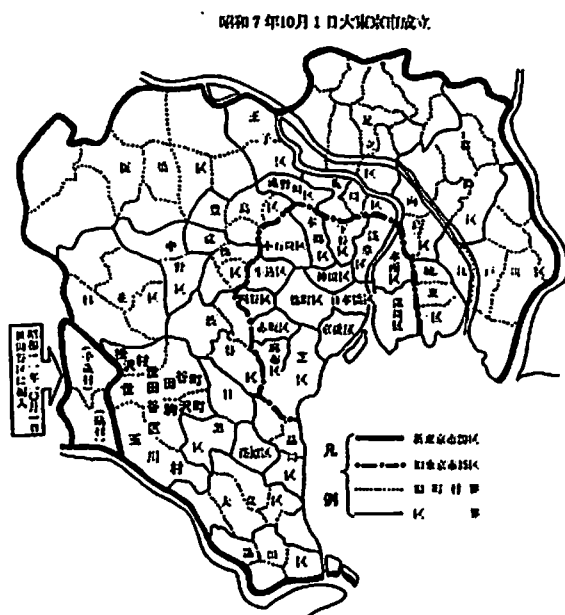


図 3-4 東京市と世田谷区の成立（世田谷区 1976）



図 3-5 昭和 11 年（1936）三軒茶屋  
（世田谷区都市整備部都市計画課 1992）

17 藤見純子, 1976, 「成城学校の移転と学園都市の建設」世田谷区編『せたがやの歴史』世田谷区。

## 2.4 戦時統制と戦後混乱期 (1941-49年)

戦時統制を次第に強め、やがて第二次大戦へと戦火に巻き込まれていく。都心や下町にくらべて空襲による家屋の損失は小さかった。しかし、世田谷でも住宅の2割を失う。戦中・戦後の混乱期における公的機関の住宅対策は、昭和16(1941)年に発足した「住宅営団」による住宅建設と東京都の住宅対策が注目される。住宅営団は、戦前は徴用工員のための住宅建設や、戦後もしばらくは応急簡易住宅の建設を担っていた。世田谷では昭和17(1942)年に計画されたエーダン中町住宅と、戦後の引揚者を対象として建設された深沢3丁目住宅の2カ所がみられる。深沢3丁目住宅は「駒沢町深沢区画整理第1工区」に位置した。図3-6のように、4戸1棟の棟割長屋を基調とした開発である(約3.1ha75棟330戸台)。1宅地平均規模が2.5-3.0間口で20~30坪宅地、4宅地が1単位の100坪街区を構成した小規模住宅の典型である(世田谷区都市整備部都市計画課1992:55)。この住宅地は、エーダン商店街(モール)へとその姿を変えていく。

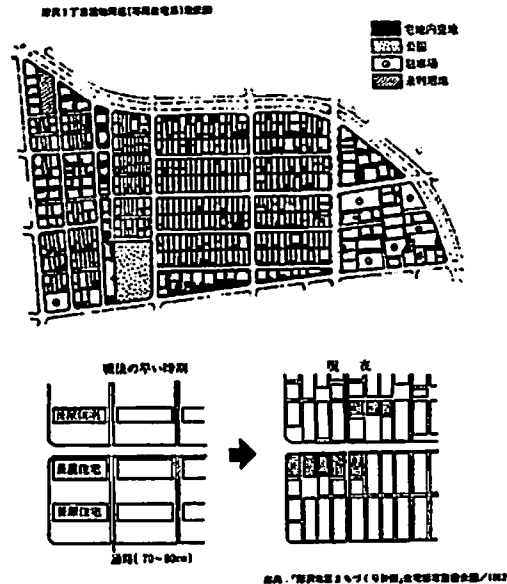


図3-6 (世田谷区都市整備部都市計画課同)

## 2.5 戦後復興と住商都市世田谷の拡張 (1950-64年)

終戦後、闇物資を口にしなければ餓死する状態が現出した(世田谷区1976:1076)。この食糧難のなかでは、三軒茶屋・下北沢の「市場」という機関がいつそう人びとを引き寄せた。世田谷区内に居住していた三好達治は三軒茶屋の開市後の商店の復興をこう描写している。

「橋を渡るとあたりはいつそう賑やかな盛り場になろうとする。店先はいつそう活気を呈して、おりからの暮色に電燈の光がげげげしくきらめきはじめる。私はその小さな店先を一軒々々見比べるようにしながら、その先の玉川線三軒茶屋のあたりまでともかく出てみることにした。このあたり一帯はむろん戦禍を被って一度は灰に帰した区域である。だから繁華街とはいっても建物はすべてバラックの仮建築で、仕飾った店先の明るくはなやかなのも、文字通り表向きの見せかけなのが、高低参差不揃いな上に、見すばらしい側面などはまったくお話にならない。そんな破滅のあとのそんな復興街に、かいがいく元気に働く商人たちの姿は、だからそのつもりで眺めれば事に屈せぬ頼もしい健気なものと見えないこともない。そんな点でも日本人は元来が気軽な楽道家で、過去にも未来にも悔恨も執着も熟慮も計画も乏しい代りに、現在のその日その日を手もなく凌いでゆく適度な才覚と生活力とは身につけている、とも見うけられる。／私は三軒茶屋付近の庶民街に出かけるたびに、いつもこの才覚と生活力とのかなり旺盛なふんいきに、少しおおげさにいうと、ある種の酩酊を覚えるのを常としている。この日もまたそうであった。この酩酊は安酒を強いられたような感でもあるが、私は必ずしもそれに向ってにわかには不満を訴えようとするつもりはない。メリヤス雑貨店、文房具店、金物店、薬種屋、蕎

音器屋、毛糸屋、ピヤホール……等々、軒並みを見比べながら、この日も私はいつものそのふんいきから漂う何かの影響が、私の胸にせまってくるのを受けとった」(三好 1950<sup>18</sup>)。

このように市場は次第に闇から光へ、「戦後復興」の空間的シンボリズムを表出していく(図 3-7)。世田谷各地域で闇市の風貌を残す商店街は、大資本により造られた商業地とは異なるノスタルジックな魅力によって人びとを魅了する。



図 3-7 下北沢南口商店街  
昭和 25 (1950) 年北沢 2 丁目付近



昭和 27 (1952) 年  
三軒茶屋 2 丁目区営小売市場  
(世田谷区立郷土資料館 2007<sup>19</sup>)

### 第 3 節 本章のまとめ

本章では、われわれが困惑する多面的な「世田谷の魅力」を深層から理解するために、世田谷の都市社会の形成過程を見てきた。世田谷の多面性は、第 1 に明治地方自治制の制定から大東京市成立までのめまぐるしい地域社会の再編に求められた。第 2 には、各時代・各地域に特徴的な統合機関・結節機関が配置され、多様な社会層が流入したことが挙げられる。鈴木榮太郎 (1957)<sup>20</sup>によれば「都市とは、国民社会 (=全体社会) における社会的交流の結節機関をそのうちに蔵している事により、村落と異なっているところの聚落社会<sup>21</sup>」と定義される (鈴木 1957 : 63)。「結節機関」とは、人・物資・資本・情報の社会的交流を結節させる機能を有する機関である<sup>22</sup>。「国民社会における都市の空間的配列とその間の社会的文化的交流との関係はそのまま国民社会における都市の機能を表現している。国民社会の中心的存在としての首都を中央に、大中小の多数の都市が全国土のうちに万遍なくばらまかれている。社会的文化的交流は、末梢の極小の都市から順次上級都市に向い、最後に国の中央の首都に及んでいる。……中央より末梢に至る流れは、命令の流れ、統治の流れ、暴力の流れであり、文化の流れでもあり、保護の流れである」(鈴木同 : 52-3)。

鈴木曰く、都市では「機関と機関」「機関と人」「人と人」が結ばれる。各時代、各地域

18 三好達治, 1950, 「東京雑記——薄暮の新緑」『月の十日』講談社。

19 世田谷区郷土資料館編, 2007, 『1945-54 写真で見る戦後復興期の世田谷』世田谷区郷土資料館。

20 鈴木榮太郎, 1957, 『都市社会学原理』有斐閣。

21 聚落社会の定義は「共同防衛の機能と生活協力の機能を有する為に、あらゆる社会文化の母体となってきたところの地域的社会的統一」である (鈴木同)。

22 ①商品流布の結節機関 (卸小売商・組合販売部)、②国民治安 (軍隊・警察)、③国民統治 (官公庁・官設的諸機関)、④技術文化流布 (工場・技術者・職人)、⑤国民信仰 (神社・寺院・教会)、⑥交通 (駅・旅館・飛行場) ⑦通信 (郵便局、電報電話局)、⑧教育 (学校) ⑨娯楽の結節機関。



には「首都東京の諸機関」と世田谷地域を結ぶ結節機関・統合機関<sup>23</sup>が配置された。大東京市に編成されていく過程で、文化圏の異なる多様な旧村が「世田谷区」として統合された。地域に配置された諸機関は、多様な社会層の人びとをこの地に引き寄せる。その機関を介して人と人が結ばれ、新たな地域社会が形成されていった。「世田谷」という田園と谷間に囲われた近郊農村は、軍事都市、文教都市、郊外住宅地、商業都市へと変貌していった。そこは、もはや「農村」でも「郊外」でもなく、人口84万の東京最大の「自立都市・世田谷」の様相を呈しはじめている。だが、ここまでみて明らかのように、都市が完全に「自立」することはない。全体社会や他の諸地域との関係を考えなければ、その地域の特質は見えない。

ある地域に人びとを魅き寄せる構造（仕組み）を、仮に「磁/地場」<sup>24</sup>と呼ぶことにしよう。「世田谷の魅力を高めるまちづくり」に不可欠なことは、過去・現在・未来の世田谷の「磁/地場」の究明と提示である。そのためには、(1)歴史的に世田谷地域に集積した諸機関と都心・他都市の諸機関との関係、(2)地域の諸機関と区内/外の人びとの関係、(3)これら機関を介した人びとの関係で生まれる「社会的文化的交流」をより精緻かつ動的に調査し、明確に提示することが求められる。これが、来年度の我々の重要な課題の1つとなるだろう。

---

23 矢崎武夫（1963）は、社会的文化的交流をせしめる支配的機関をより直接的に「統合機関」として提示した。それは「政治・軍事・経済・宗教・教育・娯楽その他の組織を通じて、広範な地域と結合し、農村の余剰を時代や社会により異なった種々な形態で都市に吸収する」。主要なものは「律令の官僚機関、寺社、封建社会の幕府、藩の行政軍事機関、問屋商人、市場、寺社、近代社会の官僚機関、金融機関、会社、軍事機関、教育機関、宗教団体、問屋、市場、百貨店、専門化した大規模な商店、中央郵便局、中央駅、新聞・ラジオ・テレビ本社、大劇場等」などである（矢崎武夫，1963，『日本都市の社会理論』学陽書房）。

24 元来「磁場」とは磁氣的現象を物理的に記述する概念であるが、一般の文脈では「特定の個人集団・空間・行為などがもつ吸引力とその影響」といった意味を付与されることが多い。都市社会学で使用される場合、奥田道大が引用している成田孝三の「磁場」の比喩（奥田道大，2004，『都市コミュニティの磁場』東京大学出版会）が想起される。一方、同じ都市社会学のなかで発展してきたパーソナル・ネットワーク論の脈絡では、松本康の「磁場のがれ」の比喩や、野沢慎司による地縁的・家族的ネットワークが個人の選択に拘束を及ぼす要因、「連帯性の強いネットワークが個人を（とくに他のネットワークの維持に関して）一定の行動に向かわせるような規範的な力を帯びている状況」としての「磁場」概念が存在している（松本康，1995，「現代都市の変容とコミュニティ、ネットワーク」『増殖するネットワーク』勁草書房、野沢慎司，1995，「パーソナル・ネットワークのなかの夫婦関係」同書）。そこで磁場概念は個人の主体的な選択性を制約する要因として若干否定的なニュアンスを付与されているが、本報告書で使用する「磁/地場」の概念は「ヒト・モノを引き寄せるような『磁場』と『地場産業』という時の『地場』を掛け合わせたもの」として、「ある地域に人びとを魅き寄せる構造（仕組み）」と定義されるため、その指示内容としては成田や奥田のものに近いといえる。

## 第4章 世田谷の魅力を高めるために—20年度への問題提起—

### 第1節 19年度のまとめ

#### 1.1 世田谷の「磁/地場」の追求

この章ではこれまでの議論を下敷きにして、来年度に実施が予定されている地域研究の事例調査に向けて候補地の選定を検討してゆく。

本年度の研究は、世田谷の姿を多面的に描くことによってその「魅力」に迫ろうとする試みであった。そのため、まずは世田谷の「いま」を描き出し、ついで現在の姿を生み出すに至った世田谷の歴史を紐解くというアプローチを採用した。

現在の世田谷区は、2章3節で明らかになったように、暮らしやすさという点では住民から一定以上の評価を与えられてきている。2007年度区民意識調査を再検討した結果からは、区民がもつ世田谷区への評価は第一に「暮らしやすさ」「住みやすさ」であり、住宅都市としての側面が強く意識されていることが確認できた。同時に、区民の暮らしやすさをサポートする数々の先進的な施策を用意してきたことが世田谷区の行政の特徴ともなっている。この暮らしやすさという長所を活かしながら、さらなるイメージアップを図ることによって住宅都市としての魅力を高めることが出来るのではないかという着想が本研究のスタートであった。この目的のためには、世田谷区がすでにもっている素材を掘り起こし、地域アイデンティを構成しなおす作業が必要となってくる。では世田谷の魅力の源泉となりうる、これらの素材はどこに求めたらよいだろうか。

2章のはじめに見たとおり、世田谷区は自然環境や歴史的背景に支えられた数々の地域資源をもっている。メディアなどで語られる世田谷はこのような数々の地域資源に恵まれた実に多面的な魅力を備えたまちとして紹介されていた。しかしそれらはいくまで商業的な視野からの分析にとどまらざるを得ないという限界から、「住宅都市」という世田谷の背骨にあたる部分は後景にしりぞいていた。そこで強調されるのは環境面やライフスタイルなどにおける高級感や先進性といった、幾分にも表層的な面に重点がおかれている。我々の目的に照らしてみると、どうしても外面的な評価に終始している感がぬぐえない。生活の場としての魅力を高めるためには別の角度から接近する必要があるだろう。

そこで現在の世田谷区の魅力や空間に堆積した歴史の結果として捉えなおし、機関の集積という観点から世田谷の多層的都市形成をマクロに論じたものが第3章である。そこでは、中央である首都東京に統合されながら、近郊農村の各地域が軍事都市、文教都市、住宅都市へと変貌していく過程があった。この変貌のなかで、各時代の「世田谷」が持つ空間的シンボリズムが生まれていく過程をみることもできた。機関とその集積という視点を設定して歴史を読みなおすことで、郊外農村から住宅都市へという世田谷区の歩みを新たな枠組みで理解する道筋が開かれることになった。

こうして我々は世田谷の魅力について、過去から現在の流れを追いつつ様々な角度から検討を加えてきた。この検討を通して得られた知見は、魅力の源泉は「地域」とその歴史のなかにあるという方向に導いてくれる。第3章の議論で確認した通り、世田谷は区という行政区域のなかに、成り立ちを異にする幾つかな特徴的な区域を抱えている。それは何より生活の場であり、積み重ねられた歴史の舞台でもある。それらの個性的な地域はそれぞれに独自の来歴や特色をもちながら、お互いの特徴を消しあうことなくゆるやかに共存しており、全体として「世田谷」というひとつの渾然一体となったイメージを構成してい

るところに世田谷区の特徴が存在している。この多様性は、同時に各地域の中でもみることが出来る。様々な社会的背景をもち異なった社会層に属する人々が、限られた空間のなかで重層的に生活を営んでいることが各地域の特色につながっているのである。この「なめらかな多様性」こそが、世田谷の魅力を高めるための素材として重要な役割を担い言うると言ってよいだろう。したがって、豊かな個性をもつ多様な生活の場としての地域を具体的に分析することが必要となってくる。

このとき有効な分析軸となるのが「機関」とその集積の視点だといえよう。世田谷区内の特徴ある地域には、それぞれの歴史にもとづき、重層的構造に支えられた、単なるベッドタウン的な住宅都市の範疇を超えた生活の舞台としての魅力が存在している。それら各地域の重層的構造が織り成す、機関と機関、人と機関、そして人々相互の「社会的文化的交流」を丹念にあとづけることによって、世田谷の「磁/地場」の構造をあきらかにし、特定地域の魅力を高めるだけでなく、区内の他地域にも適用可能な施策に結びつけることが本研究の最終的な目標となる。

## 1.2 世田谷の魅力と政策科学としての都市社会学

すると「世田谷の魅力を高めるまちづくり」研究の進む方向としては、世田谷区を代表する特徴的な地域を取上げ、そこに暮らす人々がどのように相互の関係を取り結んでおり、それがどのように地域の特性としてあらわれているのかを明らかにしてゆくことになる。そこでは、政策科学としての都市社会学が求められる。

社会学者の玉野和志は、政策形成に対する都市社会学の貢献について次のように述べる。「政策的に整備・誘導された集合財や個別の民間企業が提供している消費財のあり方が、都市住民の社会的世界の構成にどのような影響を与えるか。「人々にさまざまな生活の機会や用具を提供する商店やサービス業の事業所が、どのように空間的に配置されているかによって、当該都市の社会的な構造がどのように影響されてくるか。「経済的な諸機関の住民生活との関係に関する社会学的な調査・研究はほとんど看過されてきたといってよい」。重要なのは「(行政的空間計画の) 青写真のうえに、現実の都市住民の社会的世界の構造を重ねてみることである。……われわれはそのような土地・空間の利用形態という具体的な側面を通して、社会構造の実態にもとづいた政策の提言や評価を受け持つ必要がある」<sup>25</sup>。これは我々の研究目的とも合致するものであり、有益な指摘であるということができよう。

以下では、そのための対象として成城・下北沢・東深沢の3地域について検討を加え、来年度の調査展望としたい。

## 第2節 対象地域と展望

### 2.1 成城

まずは住宅都市世田谷を代表する区域として成城地区をとりあげてみよう。成城一帯は、関東大震災後に牛込より移転してきた成城学園の学園都市としてスタートを切っている。仙川と野川にはさまれ武蔵野の原野が広がるこの土地には、それまでわずか7軒の農家が

<sup>25</sup>玉野和志, 2004, 「都市社会研究の技法」 園部雅久・和田清美編『都市社会学入門 都市社会研究の理論と技法』文化書房博文社。

あるだけだった<sup>26</sup>。大正 14 (1925) 年から開発がはじまったが、最初に完成した住宅は僅か4軒ほどにすぎなかった。同年4月には仮設の校舎ながら成城学園も開校にこぎつける。その後急速に街の整備がすすみ、当初は学園関係者のみが居住していた成城には、小田急線の開通によって都心に通勤するサラリーマンとその家族たちが流入してきた。大正 15 (1926) 年には小田急電鉄の駅北口を中心に「学校、病院、上下水道（上水道は成城学園水道利用組合が管理）、郵便局、商店、駐在所といった、生活に必要なものは大方そろそろ学園町ができあがった」<sup>27</sup>。このとき住宅地創成にあたっての「生け垣と庭園設置の申し合わせが、その後の閑静な街並み形成と人的交流に大きく貢献した」といわれる<sup>28</sup>。

さらに住宅地としての評価を高めたのは、昭和 5 (1930) 年に朝日新聞社が主催した朝日住宅展覧会であるとされる。これはのちに「文化住宅」の名で呼ばれることになる「新時代住宅」の設計を募集し、入選作を実際に建築・展示したもので、現在ひろく行われている建売住宅の先駆ともなった。昭和 7 (1932) 年には南口に東宝撮影所が完成し、有名な映画監督や俳優などが近隣に居住するようになったことも住宅街としての名声を高めていった。つまり成城一帯は開発開始から僅か 10 年足らずで現在につながる高級住宅地としての基礎をほぼ固めたことになる。

こののち戦後を通して成城は安定した発展を続け、その地位を不動のものとしていった。おそらくはこの時期に、成城という土地のブランド的な価値が確立したものと考えられる。住宅地の外側には錚々たる企業の大規模な社宅が建設されてゆき、周辺の大蔵なども取り込みながら現在の 1-9 丁目までの区画に拡大していった。ところが 1980 年代にはじまるバブル経済とその後の崩壊によって大企業の不動産は売却されることになり、大型マンションなどに姿を変えてゆくことになる。こうした流れをうけ、旧来の住民たちにより成城の町並みを守る運動が発生した。平成 14 (2002) 年には法人格成城自治会によって「成城憲章」が制定され、成城の町並み保存にむけての住民協定が結ばれることになった。そこでは緑地率をはじめ、地下利用の制限、相続や売買にあたっての土地の細分化の禁止など、成城という地域のイメージを損なわないために住民みずからが守っていく約束が取り決められている<sup>29</sup>。成城という町に対する人々の誇りや愛着が、「成城」という地名にさらなるシンボリックな意味を持たせるための具体的な活動となってあらわれているのである。この活動を先行事例として、住宅都市世田谷の魅力を高めるために活用することは十分に意義があるといえるのではなかろうか。

## 2.2 下北沢

### (1) 雑居型商店街、高級住宅街、70 年代若者文化の共存

右図のように、下北沢の人口が急増するのは、京王線と小田急線が結節した昭和 8 (1933) 年以降のことである。2 章 1 節で見たように、近郊農村であった下北沢は、軍事施設に通う将校屋敷、戦後闇市、俸給生活者の住宅地として発達してきた (表 4-1)。

<sup>26</sup>村田裕志, 2006, 「成城の人と歴史・寸描」日本認知科学会第 24 回大会講演記録。

<sup>27</sup>世田谷区都市整備部都市計画課, 1992, 『世田谷区まちなみ形成史』世田谷区。

<sup>28</sup>せたがや百年史編纂委員会編, 1992, 『せたがや百年史 下』世田谷区。

<sup>29</sup>法人格成城自治会, 2002, 「成城憲章」(<http://www13.ocn.ne.jp/~sei-jo/kensho.htm>)。

歴史学者の佐々木隆爾（2002）はこう述べている。「若者の街として本格的に発展したのはせいぜい30年前からのことであり、この『にぎわい』を持続させようとする人々は、顧客のターゲットを若者のみに絞ることはなかった。「下北沢はこの地域に居住する人々が日常生活用品を求める街であり、ショッピングの街でもあり、アメ横的魅力を追う人々の街」である。ここに若者が参入、小劇場・ロックステージなどの要素を加えた。「歴史から知恵を汲み出すとすれば、このバランスを見落とさないことが重要」である。多くの評論家は、この地のニヒルでエロティックな雰囲気最大の魅力となっていると主張するが、その考え方は、かつてこの地が精農・篤農家、つまり生産的仕事をしている人たちのまちであり、また住民が町・街づくりをすすめるなどの歴史的年輪を積み重ねてきたことを忘れた議論である。「商店街が文化の発信源としての個性を身につけた時点で、その街は広い年齢層の人々に愛され記憶されるようになり、その人たちの足を再度引き寄せる魅力をそなえるに至った」のだ<sup>30</sup>。

## (2) 下北沢の地場

われわれは、こうした複数の社会層を引き寄せた下北沢という都市をより精緻に分析する必要がある。右図は下北沢駅周辺の商店街マップと地域計画図を重ね合わせたものである。前述のように、下北沢駅は京王線と小田急線がクロスする結節機関となった時、人口が急増した。そこには雑居型商店街、高級住宅地、学生の下宿、1970年代の若者文化が集積していった。この稀有な土地の地場、言い換えれば統合する機関、社会的交流機関、空間的シンボリズムを明確に捉えることは、「世田谷の魅力」を把握する上で重要な作業となる。

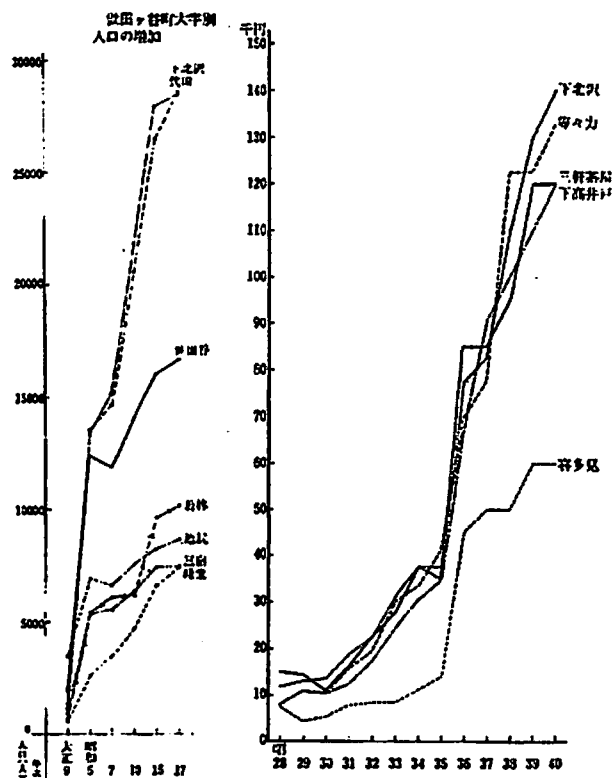


表 4-1 世田谷の人口増加（世田谷区 1976）

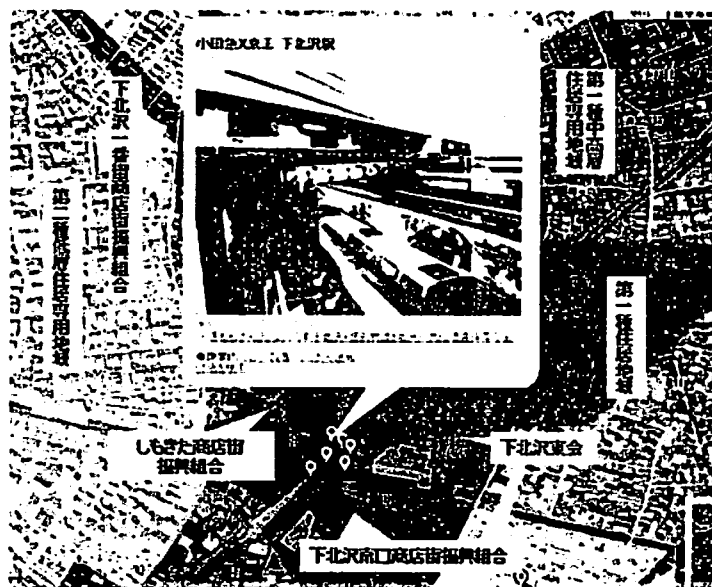


図 4-1 下北沢の都市空間

<sup>30</sup>佐々木隆爾, 2001, 「下北沢の歴史」『大都市の卸・小売業の現在と未来——若者のあふれる世田谷・下北沢商店街の分析』こうち書房。

表 4-2 下北沢発達過程	
1626	江戸時代には下北沢村と代田村。天領から彦根藩領に。
1596 ～1614	大規模な土木工事。代田村や下北沢村で、宿場や街道筋を中心に酒造家・商家増加。両村では、渋谷宿・内藤新宿・世田谷宿などに近い利点を生かして近郊農業を営み、多くの野菜・果実を出荷。
1869	府藩県三治の制により品川県設置。下北沢は五番の親村に指定。この五番組には経堂在家・赤堤・松原・代田・若林・太子堂・上馬引沢・三宿・池尻・深沢・中馬引沢・下馬引沢・野沢・奥沢・池沢・等々力・下野毛・上北沢・裏・上目黒など。
1872	廃藩置県で、世田谷 20 ヲ村は東京府・神奈川県に移管。
1873	大区小区制：品川県他の管轄地も東京府に再編。下北沢・代田・池沢村など旧品川県の 17 村が第 7 大区 6 小区に組み入れ。
1878	三新法公布、大区小区制廃止。旧来の郡町村復活。
1888	市町村制実施。町村合併。荏原郡は村々を世田谷・松沢・駒沢・玉川村の 4 村にまとめる。下北沢・代田村は、経堂在家・三宿・太子堂村とともに世田谷村に合併。
1891	騎兵第一大隊が移転、駒沢練兵場開設。二つの練兵場とそのまわりには、司令部・兵営・病院・学校などが立ち並び、数万の兵士が駐屯し、将校も居をかまえる。兵営の集中した場所は世田谷村の池尻・太子堂や駒沢村の三軒茶屋周辺。下北沢・代田は大規模な兵士たちに食糧その他の商品や労力を供給するという位置関係。
1907	玉川電車（渋谷-三軒茶屋-玉川）開通—兵営群・郊外行楽客・通勤将校
1913	京王線（笹塚—代田橋—下高井戸—調布）
1928	京王線（新宿—八王子）多摩川で採取した砂利の輸送で収益。
1928	小田急線東北沢・下北沢駅設置。しかし、大量の住民を引き寄せる契機とはならず。
1933	帝都電鉄・井の頭線開通（渋谷—下北沢—井の頭公園—吉祥寺）。下北沢住宅開発、人口急増。小田急線開通まで世田谷・下北沢・代田の人口は平行して増加していたが、昭和 5（1930）年に下北沢がこれを抜き、同 15（1940）年には代田が下北沢に肩を並べる。関東大震災をきっかけとして流入したサラリーマン・労働者の通勤の足。渋谷と新宿の両ターミナルへの通勤に至便な住宅地として人気を高めた。小田急線は下北沢駅と経堂駅に急行を停車。農地が個別に住宅化。農道が道路化され、道が曲がりくねる。
1932	世田谷町・松沢村・玉川村・駒沢町統合、世田谷区誕生。
戦後初期	開市からの復興
1955 頃	区内や小田急・京王線沿線に多くの大学・短大が移転・新設。交通の便・安い・自炊に好適な下北沢に学生下宿。「若者の街」の側面を強く持つ。 世田谷区は「田園都市」「住宅都市」としての評価を高め、交通の便の良い下北沢に人口密集。この住民の需要が、駅前商店街を成長。下北沢周辺では 9 つの商店会結成。下北沢駅を起点とする複数の商店会と下北沢駅前商店連合会が作られた。
1960 年代	地価高騰、商店圧迫、集合住宅化。借地帯家料が高騰。商店のテナント料高、収益低下。住宅が小規模化、木造アパートが密集。商店も一戸建ちでの経営では採算を取りにくくなり、集合住宅化に拍車。
1964	東京オリンピックで馬事公苑や駒沢公園が会場となり、道路開発。それを契機に国道 246 号線・環 6・環 7 の全面開通が促進。世田谷通りの改修。長期的には交通事情を好転させたが、道路に接する商店街に打撃。下北沢付近、自動車道に面する場所で昭和 35（1960）年からの 4 年間で商店数 16.5%減。
1970 年代 初頭	1960 年代後半からベトナム反戦などを掲げて「ヒッピー」を名のる若者たちが新宿・風月堂にたむろ。昭和 49（1973）年ベトナムで和平が成立、新宿・風月堂閉店。この若者たちが最初に移動したのは下北沢のジャズ喫茶だった。
1979	「下北沢音楽祭」開催：1980 年代には、下北沢駅を中心とする半径 200m 内に所在する商店 700 軒の内、半数は若者向けのブティックや喫茶店となる。「新興の若者の街」としては原宿、渋谷の公園通り、吉祥寺があったが、いずれも若者向けの種々の企画が大資本の手によりなされており、それを嫌った若者が下北沢に集まるようになり、ヤングの街として脚光を浴びてきた。「そこで、地元関係者が『下北沢文化の統一イ

	メージをつくりたい』と企画したのが昭和 54 (1979) 年の音楽祭であった。ジャズとロックを中心としたこの音楽祭に集まった若者は約 4000 人。「下北沢音楽祭は、『ヤング文化の街下北沢』のイメージを強烈に打ち出す役割を果たした」(せたがや百年史編集委員会編 1992)。
1982	飲食店経営者・本多一夫氏が「本多劇場」を開設。本多氏はマンションを建て、劇場をつけ加え、本格的小劇場とした。これの刺激のもとに、昭和 59 (1984) 年「ザ・スズナリ」「屋根裏」「ロングラン・シアター」などの小劇場が活動。
1980 年代	下北沢はマスメディアの作り出す流行に抗して、文化を保持し発信する街に。新宿ではすたれたジャズ喫茶・ロック喫茶、リズム・アンド・ブルース専門店。マンガ雑誌『ガロ』や映画パンフレットかつての新左翼の著作をそろえた古書店。1960 年代文化や風俗に関心を寄せる人たちを捉えて放さない魅力をそなえた。

### 2.3 東深沢エーダン商店街

一方、世田谷には鉄道駅という結節機関に恵まれない商業地域もある。その 1 つが 3.5 で見た住宅営団・東深沢住宅＝エーダン商店街である。戦時統制と戦後の混乱期には、そこは「住宅国策機関」であった。「住宅営団(住宅経営財団)は、これまで本格的な歴史研究もなく国民の目に触れることもなかったいわば『幻の住宅国策機関』であった。住宅営団は、日中戦争の激化とともに戦時下の国民生活の安定を図る国策の一環として、より直接的には逼迫する軍需労務者用住宅を確保するために、わが国初めての住宅供給・住宅政策の国家代行機関として 1941 年 5 月に設立された。それはまた朝鮮・台湾・中国関東州にも設立され、住宅建設や住宅団地開発はもとより植民地文化政策の一翼も担った。そして戦後の 1946 年 11 月、戦争協力機関として GHQ によって突如閉鎖命令が下され解散した」<sup>31</sup>。

住宅営団の解散後、深沢住宅は「エーダン商店街」へと姿を変え、賑わいをたもっていた。しかし、モータリゼーションの進展、相次ぐ大規模小売店(サミット・紀伊国屋・西友など)の進出により、商店街の活気は失われている。この地域社会の再生を図るために、われわれは都市計画図に社会的世界の構造を重ね、その戦略を考える必要がある。さらに、この土地には、「幻の住宅営団」という空間的シンボリズムがかすかに残っている。「住宅営団は、華やかな建築遺産を数多く残した同潤会のように世間では必ずしも注目される存在ではない。しかし、戦後の住宅政策とりわけ公営・公団住宅などの集团的住宅建設・供給そして住宅団地開発に与えた影響の大きさは量り知れないものがある。『住宅政策の 1955 年体制』といわれる戦後住宅政策のルーツが住宅営団にある、といっても過言ではあるまい」(前掲書)。このシンボリズム・集合的記憶は、地域のアイデンティティとブランドとなる可能性を秘めているように思われる。

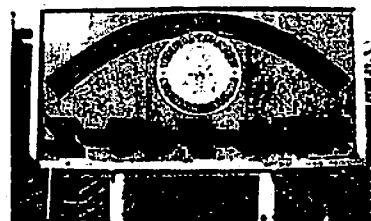


図 4-2 エーダンモール

<sup>31</sup> 西山卯三記念すまい・まちづくり文庫編, 2001, 『幻の住宅営団——戦時・戦後復興期住宅政策資料 目録・解題集』日本経済評論社。

### 第3節 来年度に向けて

ここでは世田谷を代表する地域として成城・下北沢・東深沢を取り上げ素描した。

もちろん世田谷には他にも個性豊かな地域が数多く存在しているが、本研究の主眼である社会的文化的交流の様態をつかむためには、歴史の地層のうえに展開している具体的な地区を限定して焦点をあてる必要がある。そこで区内の住宅地・商業地から象徴的な地区をとりだし、住宅地の代表として郊外農村から国内有数の高級住宅街へと変貌をとげた成城を、また商業地の代表として戦後の闇市から成長し、若者文化の発信源となるに至った下北沢を、それぞれ選び出して歴史と特徴についての整理を試みた。そして最後に、住宅地の中に浮島のように存在している商業地であり、鉄道駅という結節機関によらずに形成された独特の形成史をもつ——それは世田谷区内の商店街のある種の典型でもある——東深沢のエーダン商店街に注目し、第3の代表例として検討の俎上にのせることになった。

これらの3地域から、来年度は1ないし2地点に絞り込んで詳細な地域調査を実施する予定である。調査にあたっては、第2章で述べた「磁/地場」という視座を中心に据え、地域に人びとを魅き寄せる構造（仕組み）を明らかにすることが主眼となる。これらの地域で生まれる社会的文化的交流を(1)歴史的に世田谷地域に集積した諸機関と都心・他都市の諸機関との関係、(2)世田谷の諸機関と区内/外の人びとの関係、(3)機関を介した人びと相互の関係、という三つの観点から解きほぐしてゆく。

時に、このような社会的文化的交流は、世田谷という土地・空間に象徴的価値や集合的感情のシンボルを表出させる。この空間的シンボリズムもまた人びとを魅き寄せる磁/地場となりえる。いずれの地域が最終的な調査地となるかは現在議論が交わされているが、いずれの地域の社会的世界も世田谷区の魅力につながる「磁/地場」を豊かに示してくれるものであるだろう。